

劇場ごっこには、たくさんの方々に見に来て頂きまして、ありがとうございました。子どもたちと楽しく取り組むことができ、とても素晴らしい内容の劇場ごっこになったと思っています。早いものでもう3月。年長さんはまもなく卒園の時を迎えます。年長さん一人ひとりの成長をうれしく思うと同時に、さみしさも感じています。年長さん達には残された園生活を大いに楽しんでほしいと思います。

4歳ぐらいになってくると友だちとケンカしたときに「もう〇〇ちゃんとはあそばない！」なんて言葉を聞くようになります。3歳ぐらいまでのケンカはもっと単純でしたが、4歳を過ぎた頃からのケンカはちょっと複雑になってきます。言葉が達者になり、いろんなことが考えられるようになってきたからということもありますが、繊細な心の時期でもあるのでちょっとしたことで傷ついてしまうこともあります。

そもそも、「よくケンカする」ということは、それだけお互い惹かれあっていて「一緒にいることが多い」からこそ、その分ケンカになることも多いわけです。しかも、子どもが自覚しているわけではないと思いますが、「ケンカができるということは、後で仲直りができるという確信がある」からこそ、気兼ねなくケンカできるのです。本当に嫌いな子だったら、そもそも一緒に遊ぶこともないでしょうし、仲直りできないかもしれない子とはケンカもしないものです。

そして、「もう〇〇ちゃんとはあそばない！」と宣言するのも、あきらかに相手の気を引くための言葉だと思っています。その言葉の裏には「本当は一緒にあそびたいんだよ」、「仲直りしたいんだよ」という気持ちが隠れています。

大人はこういう言葉を聞くと、ついそれを真に受けて「そんなこと言っちゃだめだよ」とか、「みんなと仲良くしなきゃダメだよ」などと声をかけてしまいがちです。本人たちが納得しないまま、「ごめんなさい」を言わせて表面的な仲直りをさせても根本的な解決にはならないので、あまり意味が無いように思います。

この時期のケンカはいっぱいしていいと思います。「ケンカしたら、しばらく気まずい思いをする」という経験も大事だと思えますし、その気まずい思いをしている間に「自分の思いを伝えたり、相手の言い分を聞いて、相手の思いに気付いて、自分の言動を振り返ったりする」という時間を過ごすこともとても大事だと思えます。そうしたことを繰り返し経験するなかで、「どうやったら友だちとうまくやっていけるのか」を学んでいきます。その後の人生における人間関係を築いていくための練習をしているようなものなのです。ですから、むしろ必要な経験、良い経験と考えたいものです。

こんなときの園（保育者）の対応としましては、お互いの言い分を丁寧に聞き、「〇〇ちゃんはどうしたかったんだって」「□□ちゃんはこんな風に思ったんだよね」とお互いの思いを相手に伝えます。どっちが悪いとかではなく、お互いがまずは自分の思いをしっかり出し、それぞれ相手に伝えることで、相手の思いにも気づけるように、そしてお互いが納得し、折り合いをつけられるようなところを一緒に探す援助を大切にしたいと考えています。

少し注意しておきたいのは、普段から子どもが話しかけてきたときに、どんな話でも丁寧に聞いてあげていれば問題ないのですが、「お友だちに意地悪された」とか、「〇〇ちゃんとは遊びたくない」などの話のときだけ真剣に聞いてしまうと、子どもは無意識のうちに（こういう話をすれば、おかあさんが自分のことを気にかけてくれる）と思うようになり、気を引くために、わざとそんな話ばかりをするようになってしまうことがあります。ですから、どんな話でも子どもからの発信には、丁寧に応えてあげられるといいですね。もちろん、今はちょっと・・・というときもあるでしょうから、そのようなときはあとからでも時間を取ってゆっくりとお話を聞いてあげて下さい。

こうした時期を乗り越えて、たくさん経験を積み、実年齢6歳ぐらいになってくると、あれだけ寄ると触るとケンカばかりしていたのに、それが嘘みたいに大親友になっている。なんてケースもよくあることです。